

競輪とプロレス二刀流

神大出身 川崎の団体からデビュー

異色の経歴「全力で前へ」

前人未踏の「競輪戦士」へ。現役競輪選手の川上真吾さん(34)＝東京都町田市＝が、プロレスラーとの「二刀流」という新たな夢に挑んでいる。2018年に川崎市多摩区のプロレス団体「ヒートアップ」の門をたたき、昨秋プロテストに合格、昨年12月にプロデビューを飾った。「両方やるからには共倒れにならないようにしたい」。異彩を放ち、夢舞台での活躍を誓う。

(鈴木 崇宏)

「オリヤ」。新百合トウェンティワンホール(同市麻生区)に、川上さんの叫び声が響いた。「SHINGO」のリングネームで挑んだデビュー戦。兼平大介選手(36)に敗れたものの、ドロップキックや投げ技を次々と繰り出し、満員の会場を沸かせた。

川上さんは神奈川県大磯町出身。物理専攻で数学の教員を目指し、教職課程を履修するなどしてきた。だが、授業の合間に掛けた平塚競輪場や小田原競輪場で選手のスピード感に引かれ、「自分も走りたい」との思いが強まり、プロ競輪選手を養成する日本競輪学校に進路を変えた。

競輪選手を取り巻く環境は、元甲子園球児や五輪選手ら「猛者」がしのぎを削る厳しい世界。国内の選手約2300人のうち、毎年60人ほどは成績が振るわずに去っていく。また、新た



デビュー戦に臨む川上さん＝川崎市麻生区

に生きのいい新人約70人が競争へと加わる。

理数系出身選手は珍しく、「デビュー当時は(最上級クラスの)S級に所属できるとは思っていなかった」と川上さん。S級に次ぐA級では100勝以上を

達成するなど、自身も満足のいく活躍を続けてきた。

だが、10年のキャリアを積み中で、中学生の頃から好きだったプロレスにも気持ちが傾きはじめていた。「自分の時間ができた」こともあり、ヒートアップに通い始めた。19年秋に競輪選手の旅の幹事を任せられ、ジムの見学を提案。リングでレスラーにやられる自分の姿に仲間が大喜びしたこと

で「人を楽しませられる」と確信し、昨年1月にプロを志願した。

「できるうちに何でもやりたい」との向上心が原動力だ。夢だった中学・高校の数学の教員免許のほか、大型2種免許も取得するなど何事にも貪欲。競輪引退後は「飲食業をやってみよう」というほどの料理の腕前も持つ。大学時代の恩師も「教育者より変わった生き方の方が向いているよ」と背中を押してくれる。

競輪とプロレスの共通点は「勝ち方、負け方が重視される面」。特に競輪は、どういったレース展開で勝ったかも重要と説く。一方、違いは顧客の目的が全く異なる点だ。「プロレスはプレーを見たくてお金を払う」が「競輪はスリルを味わうために車券を買う人が多く、その分シビア」と分析する。

昨年12月7日のデビュー戦は「全力を出し切ったが全く歯が立たなかった」。それでも、長身を生かしたドロップキックは周囲からの評価も高く、さらに磨きをかけていくつもりだ。一方、練習後に道場の掃除に励むなど「新人」としての心得も忘れていない。「プロレスはまだ目の前のことで精いっぱいだが、とにかく全力でやりたい」。新たな夢への道は走りだしたばかりだ。